とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	東京都千代田区
園名	アスクバイリンガル保育園二番町

1．活動のテーマ

<テーマ>

世界を知ろう
～どんな国旗があるかな？～

<テーマの設定理由>

2024 年 10 月より、“バイリンガル保育園“と名称変更し、母国語以外の言語や、様々な国のスタッフに触れる機会が多くなった。園内に飾った万国旗にも子ども達が興味を持ったため、”国旗“を通して子ども達が世界を知ったり考える機会を設ける事とした。

2．活動スケジュール

11 月から 3 月まで行い、月に 1 回ネイティブの講師を招致し他国の文化に直接触れる機会を創出することで深く探究活動ができるようにした。その時点での子どもたちの興味関心をもとに問いかけや内容を考え、子どもたちの反応や言葉によって次回の内容を柔軟に変えていけるようにした。
11 月～１２月：国の概念について探求をする。文化について探求をする
1 月～3 月：国旗を構成している色や形について探求し、自分の国旗・クラスの国旗を作る

3．活動のために準備した素材や道具、環境の設定

4．探究活動の実践

（活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具）
・国旗絵本・・・日頃から子ども達が自分で国旗を見たり、気になる国旗の国名を調べるために使用
・国旗一覧・・・国旗を見比べて違いに気付いたり感じたりするために使用
・くもんの地球儀・・・様々な国の場所や日本との位置関係、国土の形に興味を持ち、調べたり国旗のイメージを膨らませるために使用
・国旗の塗り絵・・・国旗に使われている色や形により細かく気付いたり、自分なりに感じた事・考えたものを表現するために使用
・オイルクレヨン、色鉛筆、クレヨン・・・国旗塗り絵やオリジナル国旗づくりで使用

【3歳児実施分】

問いを考える：国旗という枠組みにとらわれず、日本とアメリカを題材にどんな食べ物があるかな？どんなスポーツがあるかな？と文化に関する問いかけをし、国による違いをみんなで考えた。また、国旗について探究を深め、どんな色や形が使われているかな？自分のクラスの国旗を作るとしたらどんな色やどんな形や絵にしようかな？と問いを重ね、身の回りの色はどんな色があるか、英語を用いて探したり子どもたちの興味に合わせた問いかけをした

探究活動の様子：ネイティブ講師から、各国の国旗やその国の有名な食べ物などを教えてもらった後、グループ毎に自分が知っている国を教えあった。国旗図鑑や地球儀を見て様々な国がある事、国によって国旗の色や模様など異なることを話し合った。また、同じグループに外国出身の保護者を持つ友だちがいると、「〇〇ちゃんの国はどこ？」と興味を示していた。さらに、各国の国旗を見ながらその国の有名な食べ物やスポーツなどを知り、「私もハンバーガ好き！」と楽しみながら国や国旗のデザインに親しんだ。
国旗のデザインに興味を持ち、普段から国旗絵本を眺めて国名を言い合ったり、「知ってるよ！」「行ったことあるよ」と楽しんでいたので、国旗の塗り絵に取り組めるようにした。
国旗の色塗りでは、「〇〇色にしたよ！」と色に関する言葉も聞かれたため、講師から英語で色の名前を教えてもらった。英語での色名をよく知っており、自信たっぷりに元気に発言していた。身の回りの“〇〇色”を探すことも積極的で楽しんでいた。色についての問いかけには、「赤、黒、黄色が多い！」と発言する子どもたち。特に赤と答える子が多かった。複数の国旗を見比べて「〇〇と同じ色」と気付く子どももいた。
国旗の塗り絵では、実際と同じ色に塗りたがる子や好きな色を使う子など様々だったが、同じグループの友だちの国旗を見たり感想を述べたりして進めていた。国旗を通して親しんだ様々な色を使いながら自分で好きな国旗を描く活動では、自分の好きな物を描いたり混色実験をしながら描く子もいた。友だちの作った国旗にも興味を持っていることから、クラス皆で自クラスの旗を作った。「ぱんだ組（自クラス）の旗はどんな色がいい？」の問いかけに「ぱんだだから白と黒！」好きな色を挙げて「みずいろ！」と発想したり、「どんな絵・形がいいかな？」に「ぱんだ！」と発案した子に続いて、「うさぎも！」「じゃあ、ぞうも！」と他のクラスの動物も書こうとアイディアが出てきた。 最終的に、大きなパンダの周りを他クラスの動物が囲んだ旗ができた。英語講師から何を描いたのか尋ねられると「パンダ」「キリン」「ひよこ」 と沢山の動物名が挙がった。動物を英語にして言ってみたり、「〇〇はー？」と質問したりと意欲的な子どもたち。色では、これまでに講師と一緒に楽しく学んできた英語表現を使って「ブルー」「ブラック」と得意げに答えてた。色や形を見て国旗の名前を考えたり当てるクイズでは、繰り返すうちに素早く出でくる国旗カードを見て一瞬で答えていた。飾ってある国旗や絵本を見て「〇〇だ！」と嬉しそうに教える姿も見られた。

ふりかえり（保育士の気づき）：
国旗に使われている色に着目したところ、「赤色が多い」と気付いた子ども達が多かったことは発見だった。目につく色だから国旗に使われているのかもしれない、と職員自身の気づきにもなった。
塗り絵は、形を見る⇒調べる⇒発見する⇒塗る、と３歳クラスとしては工程が多かったが、国にまつわる有名な食べ物やスポーツなどで興味を引き出すことで、概念の難しい“国旗“テーマでも、最後まで集中して取り組めることは発見だった。
混色はクレヨンなどでやって見せたが、３歳児の中にはクレヨンで混色することが難しい子も見受けられたため、色水や絵具で取り組めるようにするのもよいかもしれないと感じた。
英語への興味から国旗への探求も深まり楽しく取り組むことができた活動もあったため、英語や言葉への興味を通して、様々な活動も楽しく進めてみたい。

【4歳児実施分】

問いを考える：国旗という枠組みにとらわれず、日本とアメリカを題材にどんな食べ物があるかな？どんなスポーツがあるかな？と文化に関する問いかけをし、国による違いをみんなで考えた。また、国旗について探究を深め、どんな色や形が使われているかな？自分のクラスの国旗を作るとしたらどんな色やどんな絵にしようかな？と問いを重ね、身の回りの色はどんな色があるか、英語を用いて探したり子どもたちの興味に合わせた問いかけをした

探究活動の様子： ネイティブ講師から、各国の国旗やその国の有名な食べ物などを教えてもらった後、グループ毎に自分の知っている国を伝え合うと、友だちの話に耳を傾けつつも、「〇〇、知っているよ！」「それは、知らなーい」と積極的に自分の思いも伝え合っていた。
地球儀で世界の国を見ると、「こんな形なんだ」「ブロックみたいだね」と身の回りのものと比較して、気づきを友だち同士で伝え合う姿もあった。
自由活動中も、自発的に国旗絵本を眺めて自分好みの国を見つけて興味を示すようになった。
国旗の塗り絵では、国旗絵本を熱心に観察して正しく再現しようとする子どももいれば、「自分の国を作るなら、どんな色にしたい？」という保育者の問いかけに「かわいい色にする！」と明るい色で塗ったり色鉛筆を複数重ねて自分好みの色を作ろうと試す姿も見られた。
また、塗り絵もグループに分かれて行うと、友だちとどんな色に・形にするのか話し合いながら進めていた。混色ができそうな画材を自分で選び、重ねる色の組み合わせを変える子や、どんどん色を重ねて色の変化を観察する子もいた。その中でも、自分の好きな国旗と全く同じ色に塗ることを喜ぶ子もおり、「見て！〇〇（国名）だよ！」と正確な色で再現することに夢中になり、じっくり国旗見本を観察しては色を選んでいる姿も見られた。
保育者が混色の方法を知らせると、白紙に積極的に色鉛筆やオイルクレヨンの色を重ねていた。最初は、「こんな色になっちゃった。。」とイメージ通りの色が出来ず落ち込んでいたが、保育者が「新しい色だね」「〇〇のイメージに合うんじゃないかな」と知らせると、気持ちを立て直し、出来た色で国旗を描いていた。
自分の国のイメージを問われると、「サンタさんがいる国！」「動物がいいな」と好きな物を中心に発想していた。「きりん組の旗はどんな色がいい？」の問いかけに「みずいろ！」「あか！」好きな色を挙げて「レインボー！」「にじは？」と発想したので花紙を使うことにした。「どんな絵・形がいいかな？」に「どうぶつ！」と発案した子に続いて、「きりん！」「じゃあ、ペンギン・いるか！」と色々な生き物も書こうとアイディアが沸き、皆で一つのクラス国旗を完成させた。講師からクラス旗の色や何の動物を描いたのかなど問いかけられると「ピンク！」「ブルー！」と答え、動物は「ヘビ・イルカ・くま・シャチ・ペンギン・きりん」と答えると講師が英語で教えてくれ、みんなで「スネーク・ドロフィン・ベアー」と他の生き物も英語で表現していた。また国旗クイズでは国旗に使われている色や模様からどの国の国旗かを考えて答え、「アメリカ」「カナダ」「スペイン」と盛り上がっていた。

ふりかえり（保育士の気づき）：“自分ならどんな国旗を作るか？”の活動では、具体的に国旗の色や形に着目できるように問いかける事で、子どもたちのイメージが広がりやすいことが分かった。
また国旗の塗り絵では、好きな色で描くよりも、実際の国旗を観察して忠実に再現したい子どももいて、日常をじっくり観察して自分なりに感じ取ることで探求する子もいるのだと学びになった。なので、すぐに創造活動にするだけではなく、その前にじっくり観察したり触れる時間を設けても良いかと感じた。
思うような混色ができなかったときに、画材を変えて試す子もいたため、オイルクレヨン、クレヨン、色鉛筆以外にも、絵具などの画材や他の素材を用意すると、子どもたちの探究活動の幅や深さが増すかもしれないと思った。

【5 歳児実施分】

問いを考える：国旗という枠組みにとらわれず、日本とアメリカを題材にどんな食べ物があるかな？どんなスポーツがあるかな？と文化に関する問いかけをし、国による違いをみんなで考えた。また、国旗について探究を深め、どんな色や形が使われているかな？自分のクラスの国旗を作るとしたらどんな色を使い、どんなデザイン・イメージにしようかな？その理由は？と問いを重ね、身の回りの色はどんな色があるか、英語を用いて探したり子どもたちの興味に合わせた問いかけをした。

探究活動の様子：専任の英語講師から各国の有名な食べ物についてクイズ形式で質問されると、積極的に手を挙げ、知っている“外国っぽい”食べ物や自分の好きな食べ物を答えていた。
グループ毎に日本と外国の行事について出し合いクラス内で発表の場を設けると、「ハロウィンは日本も外国にもあるよ！」「クリスマスは日本の行事って聞いたよ」など、予想外の結果となった。ハロウィンは日本のお盆に通じる側面があり、クリスマスは外来行事として古い歴史があることなどをわかりやすい言葉で知らせると、興味深く聞いている姿もあった。
国旗に興味を持ち、自由活動中も眺めたりレゴで国旗のデザインを再現するなど遊びの中に国旗を意識する姿が多く見られたので、国旗の塗り絵やオリジナルの国旗を描く活動を取り入れた。オリジナル国旗を描く場面では、楽しんでイメージを膨らませながら行う姿や“自由に描く”という内容に苦戦する様子が見られた。中には、記憶している国旗を再現する子もいた。国旗の色を正確に理解しようとしたり、本物とは異なる色で塗ろうとする姿も見られたため、講師と身近な色探しをしながら英語の色名に触れたり、混色について知る活動を取り入れた。
色の混色では、自由に画材を選び、実験のように白紙に色を重ねて色の変化を観察する子や「青緑作りたいんだけど・・」とイメージした色を再現するために色を微調節しながら重ねる子もいた。なかなかうまくいかず落ち込み瞬間もあったが、「どこにもない新しい色ができたんじゃないかな？」と保育者が前向きな言葉をかけると、気持ちを立て直し、自分のオリジナル国旗づくりを始めた。“どんな国にしたいか？”の問いかけには、「公園がいっぱいあって遊べる国！」「魚にする！」と明確なイメージを持ち描いていた。その中でも、自分の好きな国旗を正確な色で再現することに夢中になり、じっくり国旗見本を観察しては黙々と塗っている姿も見られた。友だちのオリジナル国旗を眺めたり意見を述べ合う姿も見られたため、皆で”クラスの国旗”を作る活動をした。
「ぞう組は強そうだから赤色を使った」「みんなが好きかなと思ってきれいな水色にした」など、クラスのことを想像しながら描く子や、クラスの中で見つけた色を織り交ぜる子、「みんなでキャンプ行きたい」とやりたいことを描く子など、さまざまに発想していた。友だちの描いた国旗や理由に興味を持って聞いている様子だった。大きな紙に子ども達みんなでクラスの国旗を描くと、他児から出たアイディアを膨らませて山の絵や水色・青色を描いたりしていた。また、作った旗を英語講師と一緒に観察すると、自分たちが描いたイラストや色について自信をもって説明していた。また、世界の国旗に含まれている形や色も英語で表現しながら、国旗を構成している絵や色について発見を楽しんでいた。

ふりかえり（保育士の気づき）：“自分ならどんな国旗を作るか？”の活動では、具体的に国旗の色や形に着目できるように問いかける事で、子どもたちのイメージが広がりやすいことが分かった。
また国旗の塗り絵では、好きな色で描くよりも、実際の国旗を観察して忠実に再現したい子どももいて、日常をじっくり観察して自分なりに感じ取ることで探求する子もいるのだと学びになった。なので、すぐに創造活動にするだけではなく、その前にじっくり観察したり触れる時間や、実際の国旗の色を再現してみる取り組みを作っても良いかと感じた。
思うような混色ができなかったときに、画材を変えて試す子もいたため、オイルクレヨン、クレヨン、色鉛筆以外にも、絵具や色水などより多くの画材を用意すると、子どもたちの探究活動の幅や深さが増すかもし

れないと思った。
クラスで一つ作った国旗は、子ども達が思い思いに絵を描き、クラスとしてテーマやまとまりが一つにならなかったので、事前に子ども達の意見を吸い上げながらテーマを決める工程を持つと、より探求が深まったかもしれない。

3歳クラス

4歳クラス

5歳クラス

とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	東京都千代田区
園名	アスクバイリンガル保育園二番町

1．活動のテーマ

<テーマ>

音の鳴る仕組みを考えてみよう

<テーマの設定理由>

朝の会などで歌に親しむ機会が多くなったり、音楽専任の講師によるおんがくプログラムで“音”を使って遊ぶ機会があり、子どもたちも楽しんでいる。そこで、音楽講師と連携して、身の回りの音に親しんで考えたり音を作って探求することとした。

2．活動スケジュール

11 月から３月まで行い、月に 1～２回専用講師を承知して活動を行い、深く探究活動ができるようにした。その時点での子どもたちの興味関心をもとに問いかけや内容を考え、子どもたちの反応や言葉によって次回の内容を柔軟に変えていけるようにした。

11 月～１２月：身近な物のオノマトペや、身の回りの物から出る音探しをしながら音の鳴り方の違いについて探求する。

1 月～３月：本物の楽器も使ったり廃材を使って自分たちで楽器作りをしながら音の鳴り方・鳴る仕組みへの探求を深める。

３．活動のために準備した素材や道具、環境の設定

４．探究活動の実践

【3 歳児実施分】

問いを考える：身近な素材から出る音やオノマトペ探しをする中で「どんな音がするかな？」「動かし方を変えると音も変わるかな？」を考えながら行い、音への興味を深めたり音を構成する要素を意識できるようにしていった。また、本物の楽器とイラストカードを使って「この音はどの音と同じかな？」と音の仲間探しをしたり、「この音とこの音は何が違うかな？」「なんで同じ形・大きさなのに音が変わるのかな？」と音の鳴る仕組みを考えていった。「身近な物で楽器を作ることができるかな？」と問いかけて廃材を使った楽器づくりに取り組み「どんな音が鳴るかな？」と試行を重ねていった。また、「ピアノに合わせて鳴らしてみたり叩いてみたりしてみよう」と思い思いに自作の楽器を鳴らして、オリジナルの音を楽しみながら体感した。

（活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具）

・紙、鉛筆、ホワイトボード・・・グループディスカッション、発表

・身近なもので音が鳴る材料（ペットボトル、割りばし、袋、玩具など）

・・・素材や動かし方によって音の違いを知る

・表情カード・・・感情のオノマトペを考える

・タングドラム／打楽器（タンバリン、トライアングル、木琴など）・・・叩き方の違いなど、関わり方による音の違いを体感したり考える／タングドラムのように、普段あまり聞かない音色に触れ、音への興味を深める

・メジャースケール、ベルハーモニーデスクタイプ、ミュージックベルタッチ式・・音の鳴る仕組み（高低の仕組み）を考える

・廃材・・・自分たちで楽器を作る

・イラストカード・・・楽器の音を仲間分けする

探究活動の様子：・身近な素材から出る音やオノマトペ探しでは、「どんな音がするかな？」「動かし方を変えると音も変わるかな？」の問いかけに、素材を叩いてみたり振ってみたりしていた。クラス活動の中で、“身近にあるもので音のなるもの“を探してみると「これは？」「これも！」といろいろな物から出る音に興味を示していた。更に音の範囲を広げて虫の音を流し、前回とは違う音色を体感した上で、日常の中のオノマトペを話し合った。その結果、「シャカシャカ」「ちゃぷちゃぷ」「ガウガウ」「ドンドン」などたくさんのオノマトペが挙がった。

実際に身の回りのもので音が鳴るものを探し、叩いたり振ったりして演奏してみた。「シャカシャカ」「カンカン」「コンコン」とそれぞれ叩く場所や高さを変えると音の大きさや響きが変わることを実感しました。実際の楽器にも触れ、スティックの握り方や叩くスピードの違いで様々な音色の変化にも気づいた。ベルハーモニーで音の高低が変わることについては、「文字（音階表記）が違うからだよ」とユニークな発想も聞かれた。タッチする強さを変えてみたり、異なる音階のベルを交互に鳴らして、音の違いを確かめる姿も見られた。

楽器作りでは、「ここに輪ゴムをつけてみる」と試すように製作したり、色分けされていたベルハーモニーからイメージを持って「色も塗ってカラフルにする」と楽しむ姿が見られた。「中に入れすぎると音がしなくなる」と、発見をする子もいて、音を鳴らしながら材料を付け足したり抜いたりしていた。保育者のピアノに合わせて自分たちオリジナルの楽器を鳴らしてみると、まるで本物の楽器を奏でるようにノリ

ノリの子どもたち。体を揺らしたり、口ずさんだりしながら楽しんでいた。「これも使ったらいいんじゃないー？」と実際の楽器も一緒に使いながら楽しんでいた。保育者を真似て、楽譜を見ながら自作のピアノを弾く子もいた。本物の楽器への興味もより深まり、ハンドベルを音階順に並べたり、簡単な曲を演奏したりと夢中になって楽しんでいた。

ふりかえり（保育士の気づき）：普段何気なく過ごしている中でも、様々なオノマトペがあることは大人の立場でも発見だった。保育者自身の新しい発見や驚きなども子どもたちと共有していくことで、子どもたちもより、わくわくしながら探究活動を進めることができることを体感した。
子ども達から、「こんな音がした」「これもなんか音がするよ」と、普段あまり音を意識していなかったものから出る音に気付いて興味を持っていた。本物の楽器に触れる、鳴らすことを楽しみに、より積極的に探究活動に取り組むことができた。身近な物からはなかなか出せない音色を本物の楽器を通して触れることで、子ども達がより音への興味を深めることができると感じた。
製作が好きな子が多いため、楽器作りも楽しみながら行うことができた。身近にあるもので探して見つけ、子ども達の意欲や興味を引き出すことができたので良かった。

【4歳児実施分】

問いを考える：身近な素材から出る音やオノマトペ探しをする中で「どんな音がするかな？」「動かし方を変えると音も変わるかな？」を考えながら行い、音への興味を深めたり音を構成する要素を意識できるようにしていった。また、本物の楽器とイラストカードを使って「楽器を（種類別に）仲間分けしてみよう」と音の仲間探しをしたり、「どうやって音が出ているかな？」と音の鳴る仕組みを考えていった。廃材を使った楽器づくりを通して、「どうしたら音が鳴るかな？」「音を出してみよう！」と試行を重ねていった。

探究活動の様子：・表情カードから音を考える取り組みでは、クイズ形式で行ったこともあり、子どもたちは楽しんで発言していた。泣く→エンエン、怒る→プンプン、笑顔→ニコニコなどの言葉が挙がった。保育者が子どもたちの考えた音を受け止めながら考えの幅が広がるように声をかけると、次々意見が出た。

・身近な音についてもどんな音が周りにあるのか、音の仕組みについて講師と見つけたり考えたりし、実際に音を出してみた。音当てクイズでは何を使って音を出したのかを目を瞑り耳をすませて考え、講師が音を出すと「ゆか！棒！コップ！」と聞いた音から考えて答えてた。答えはペットボトルと割り箸。正解を聞くと「そんな音が出るの！」と驚いたり当たった子は喜んだりしていた。他にも新聞紙にはどんな音があるか、実際に叩いたり破ったりしていろいろな音を発見した。ペットボトルと割り箸を使ってカエルの歌に合わせてグループごとに音を出して演奏会をすると、叩く強さや場所によって変わる音を知りリズミカルに楽しむ様子が見られた。同じものでも、叩き方や場所によって音が異なることに気づく姿がった。

クラスの中でもおもちゃや水筒など探したものや楽器はどんな音がするのかを問いかけると、グループごとに身の回りの音探しをして「ガンガン」「パンパン」「カンカン」などたくさんの音を予想していた。実際に音を出してみると音の違いや伝わる振動、音の高さなど様々違いに気づく姿が見られ、楽器への興味も広がっていた。

実際に楽器を使って音の仲間分けをすると、振動、音色、高低など様々な違いに気づく子が多かった。木琴、すず、ミュージックベル、メジャースケールなどを使って一つの楽器でも叩き方などで音が変わるか？、同じ見た目でも音色や高低が異なることを不思議そうに何度も試したり、胴体部分を体に当てて「ここが振動してたから鳴っているんだよ！」「色が違うから」「この丸の大きさじゃない？」と細かな部品も観察しながら音の鳴る原理を考えていた。

色々な廃材の音を出しながら楽器作りに使う材料を決めると、「こうしたらいい」などアイディアを出し工夫しながら製作していた。作りながら音を鳴らし、友だちが作った楽器を共有している姿が見られた。

グループごとに自分の作った楽器の披露をし、何の楽器を作ったのか、工夫したところ、お気に入りのところなど発表した。それぞれが作ったギターやマラカス、ギロ、太鼓。「弦のところをがんばりました」「キラキラテープのところ」「ビーズを入れてかわいくしたところ」など緊張しながらもみんなの前で発表することができた。その後、音を出す前にどんな音が鳴るか予想すると「カンカン」「シャンシャン」「ジャンジャン」などたくさんでた。実際に音を鳴らしてみると「ギコギコ」「シャラシャラ」「パチンパチン」など予想した音以外の音の発見や音の違い気づき、「こんな音がするんだね」と驚いたり嬉しそうに話したりする子どもたち。最後に手作り楽器でピアノに合わせて演奏会を楽しみ、活動が終わると「違う楽器も作りたい」と廃材で自分で作る姿が見られた。

ふりかえり（保育士の気づき）：表情のオノマトペは、保育者と子どもで共に考え探したことで、一般的なイメージに捕らわれない意見も引き出せた。保育者の声掛けで予想以上に意見が出たため、今後も様々な音に興味が広げられるような活動を取り入れたいと思った。普段何気なく過ごしている中でも、様々なオノマトペがあることは大人の立場でも発見だった。保育者自身の新しい発見や驚きなども子どもたちと共有していくことで、子どもたちもより、わくわくしながら探究活動を進めることができることを体感した。楽器の分類では理解が難しい所もあったので、ヒントを与えて楽しみながら行えるようにした。いろいろな楽器に実

際に触れたり知ることができたので、作った楽器以外にも別の種類の楽器を作りたいという姿が見られ、興味の幅が広がっていった。本物の楽器に触れる機会を持ったことで、子どもたちの楽器作りや鳴らし方の発想も広がったと感じた。

【5 歳児実施分】

問いを考える：「日常に存在する音はどんなものがあるか？」と、身近な素材から出る音やオノマトペ探しから始まり、グループごとに考え共有し合った。次に実際に素材を使って「動かし方を変えると音も変わるかな？」「素材が壊れないように音を出すには力加減をどうしたらよいか？」を考えながら行い、音への興味を深めたり音を構成する要素を意識できるようにしていった。また、本物の楽器とイラストカードを使って「この音はどの音と同じかな？」と音の仲間探しをしたり、「（敢えて）バチを使わずに楽器を鳴らしてみよう」「この音とこの音は何が違うかな？」「なんで同じ形・大きさなのに音が変わるのかな？」と音の鳴る仕組みを考えていった。廃材を使った楽器づくりを通して、「どうやったら音が鳴るかな？」と試行を重ねていった。

探究活動の様子：「自分たちの周りにある音（オノマトペ）はどんなものがあるかな？」との問いかけに、グループ毎に話し合うと、最初は机を叩く「トントン」、手拍子「ぱちぱち」などの物理的な音が出てきたが、「ドキドキ」「ワクワク」など感情的な表現や、静けさを表現した「しーん」、電気の「ぴかぴか」など、実際の音ではなくイメージを表現した言葉にも気付いた。特に、物理的な音が多数出ていた。

音楽講師と一緒に、身近な素材（新聞紙、ペットボトルと割りばし、など）を使って、触り方（揉む、破る、投げ上げる、など）や力加減などを変えるとどのように音が変わるか？体感した。同じペットボトルでも、大きさや凹凸の形などで音色が変わることに気づいたり、新聞紙も破る・はじく・こする、など様々な関わり方を試していた。ほかにも、耳元で新聞紙をやさしくこすってみたり、ダイナミックに破ったり、力の入れ方や新聞紙の量によっても音が変わることに気付いた子ども達もいた。

クラスでの活動中でも、「これはこんな音！」「鳴らす物の個数を増やしたら音が変わった！」と早速身の回りのものを使って試していた。そこで、廃材のティッシュケースを使って様々な音を出す活動をした。「破れないように音を出すにはどうしたらよいか？」と問いかけると、力加減をしながら手で叩いたり箱同士で叩いたり、バイオリンのように耳元に添えて音を鳴らす子もいた。時には中に何かを入れてマラカスのように揺らしてみる子もいた。

木琴をあえてバチを使わずに指などで鳴らしてみた。バチの時よりも音が響かず、少し不服そうにする姿や首をかしげて疑問に思っている子もいた。更に、「部屋にあるもので木琴が鳴らせそうなものはなんだろう？」と探し、素材や硬さによる違いだけでなく物の持ち方・叩く場所など様々な視点に気づいて試していた。

ミュージックベル、メジャースケールを使った活動では、胴体部分を手で抑えて「ここが振動してたから鳴っているんだ！」「このバネが違うから音が違うのかも」「この丸の大きさじゃない？」と細かな部品も観察しながら音の鳴る原理を考えていた。

廃材を使った楽器作りは、ティッシュ箱や段ボール、輪ゴムなど様々な素材を活用し、それぞれがギターのような弦楽器や、割り箸をバチにした打楽器を作っていた。鳴らし方や鳴らす場所によって異なる音になる弦楽器を考えて作るなど、初めから広い発想で作品をイメージして作っている姿が見られた。

作った楽器を使って、好きな曲に合わせて鳴らしてみると、曲調に合わせて強く叩いたり優しくそっと撫でたりしていた。輪ゴムの弦の抑える場所や弾く素材によって音色や音の高低が変わることに気づいていた。「２０個（音の種類が）できるよ！」と友だちの演奏の仕方から刺激を受け、更に新しい音が出せないか？自分なりに発想して鳴らし方や素材の位置を変化させて試していた。グループ内でも互いの工夫点や音を聞き合ったり感想を述べあい、認め合っている姿もあった。

ふりかえり（保育士の気づき）：表情のオノマトペは、保育者と子どもで共に考え探したことで、一般的なイメージに捕らわれない意見も引き出せた。保育者の声掛けで予想以上に意見が出たため、今後も様々な音に興味が広げられるような活動を取り入れたい。

普段何気なく過ごしている中でも、様々なオノマトペがあることは大人の立場でも発見だった。保育者自身の新しい発見や驚きなども子どもたちと共有していくことで、子どもたちもより、わくわくしながら探究活動を進めることができることを体感した。

素材を使った探求では、力加減が強すぎて似た音ばかりになってしまう様子も見られたため、「破れないように音を出すにはどうしたらよいか？」と問いを変えることで、新しい音も発見できることがわかった。

本物の楽器を使うことで、音色や質感などで五感が刺激されて子どもたちもよりわくわくした様子で活動に参加したり、廃材などにはない比較・発見ができ、本物に触れることの大切さを改めて感じた。また、ただ廃材を使った楽器作りだけ行うよりも、“音の鳴り方”の探究過程を持ったことで作る楽器の発想もより豊かで実際の楽器に近いものができたと感じた。

３歳クラス

4歳クラス

5歳クラス

とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	東京都千代田区
園名	アスクバイリンガル保育園二番町

1．活動のテーマ

<テーマ>

身体
　～いろいろな力を伸ばそう～

<テーマの設定理由>

身体を動かすことが好きで、回転やジャンプなどの動きを日々楽しんでいる。これを発展させて、様々な動きや遊具に挑戦しながらバランス感覚や体幹の成長を促し、個々人の”できる”を増やす。

2．活動スケジュール

11 月から 3 月まで行い、月に 1 回体操の専任講師を招致し、様々な動作を試したり、講師の指導の下で遊具を使うなどしながら深く探究活動ができるようにした。その時点での子どもたちの興味関心をもとに問いかけや内容を考え、子どもたちの反応や言葉によって次回の内容を柔軟に変えていけるようにした。
11 月～1 月：ジャンプやそのためのバランス力について試したり、計測しながら、効果的なジャンプの仕方、バランスの取り方を考える
2 月：早く走る為の方法を試しながら考える
3 月：強い力で押す方法を考える

3．活動のために準備した素材や道具、環境の設定

4．探究活動の実践

（活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具）
・動物の絵本、イラスト写真・・・ジャンプが得意な動物やその動作をイメージしやすくする
・ジャンプ＆スプリングマット・・・静止した状態でのバランス確保や、ジャンプと組み合わせたバランスについて、楽しみながら考えたり試したりする
・跳び箱、マット、ボール・・・バランス力を身に着けるために子どもたちが考えた遊びを再現する
・パカパカ（缶ぽっくり）、補助付き竹馬・・・（主に 5 歳クラス）普段あまりしない動作を通して、体の使い方やバランスの取り方をより深く考える

【3 歳児実施分】

問いを考える：

「ジャンプが得意な動物は？」からイメージを膨らませ「どうしたら遠くにジャンプできるか？」動物の跳び方を真似しながらジャンプの仕方を考えた。ジャンプの着地でよろけないためにも、「どうすればバランスを保つことができるか？」について、姿勢や体の使い方を探っていった。静的なバランスの取り方を体感して自信がついてきたことから、「どうすれば早く走れるか？」にも着目し、計測を取りながら目標をもって試していった。

探究活動の様子：

動物の絵本を見ながら、ジャンプが得意な動物に「うさぎ！」を挙げ、手を頭の上に載せてジャンプの真似をしてみた。思ったよりもジャンプしにくいことに気付き、手を大きく振ってみたりと、実際に自分たちが跳びやすい体の形を作り始めた。更に、「もっと遠くに跳べそうな動物は？」と考え直し、「カエルみたいにしよう！」と動作を真似てみた。どのくらい遠くに飛べたか視覚的にわかるように、目印をつけると、より積極的になり、何度も遠くへのジャンプを試した。記録が前回と同じ子もいれば伸びた子もいて、友だち同士ハイタッチして喜んでいた。

体のバランスについてどうやったら長く保てるかみんなで考えながら挑戦した際は、両手をまっすぐ横に伸ばしてみたり、上げている足をもう片方の足にくっつけてみたりと試行錯誤しながら行い、前回よりも記録が伸びた子もいた。

ジャンプやバランスをとることに意欲的だったため、トランポリンマットを導入すると、最初は慎重に小さくジャンプしていた子も、以前皆で考えたバランスの取り方や跳び方法を保育者に知らせながら実践し、落ちずに跳ぶことに意欲的だった。

体を動かす事に自信がついてきたところで、「どうすればもっと足が速くなるか」についてみんなで考え、実践した際は、まずは、反対に「遅くなるには」を考えると、「手を伸ばして走る」「上を向いて走る」と意見が出た。その後、本題の「速くなるにはどうしたら良いか」を考えると、「手をグーにして腕を振る」「真っ直ぐ前を見る」「足を上げて走る」と的を得た回答が返ってきた。実際に意識しながら走ってみると前回よりタイムが速くなった子もいて、意識を持つことで速く走ることができることに気づき、子どもたちのやる気もパワーアップしていった。

更に、押す力について考えるために、アザラシ歩行でタイムを計測し、手の力だけで前に進む遊びに取り組んだ。実際にやってみると思ったより難しく、なかなか思うスピードが出なかったが、どうしたらもっと速く進めるのか、押して遊べる遊びはあるかみんなで考えてやってみた。「跳び箱があるよ」「パンチマシーンもあるね」「お相撲さん」と押して遊ぶあそびが出てきた。

ふりかえり（保育士の気づき）：

動物を例に想像したり跳んだ距離の目標を持つことで、子どもたちの意欲も変わり、達成感にも繋がると感じた。試したり考えながらも、動物の真似を通して楽しそうに取り組む姿を見ることができ、集中して楽しく取り組める運動遊びを取り入れていきたいと思った。また、３歳という月齢ながら、子どもたち自身で考え、様々な意見が出たことは驚きだった。速く走ることに憧れを持っている子もいたため、今回の記録をもとに、継続して普段の遊びに取り入れ、結果の変化を見ていきたい。

【4歳児実施分】

問いを考える：

普段、よく楽しんでいる”ジャンプ”や”走る”事を取り上げ、「どうしたら上手にジャンプできるか？」「どうすれば早く走れるか？」を問いを持ち、計測を取りながら目標をもって試していった。また、跳んだり走るには体のバランスを保つ必要があることを体感し、「どんな遊びでバランス力が見に着くか？」発想したり実際に試していった。

探究活動の様子：

グループごとにどのような遊びをするとジャンプが上達するか？話し合って発表すると、“大縄、カエルジャンプ、鬼ごっこ、かけっこ、跳び箱“など様々出た。そこで体操講師と実際に跳び箱でカエルジャンプをした後に計測してみると前回よりも記録が伸び喜ぶ姿や伸びずに悔しがる姿があった。

ジャンプをするときにも必要な、バランス力を考えることにし、片足をあげて何秒バランスを保てるかを計測した。さらに上手になるには？どんな動き、遊びをしたら記録が伸びるのかみんなで考え意見を出し合うと「トランポリン・ケンケンパ・とびばこ・カエルジャンプ」などたくさんの意見が出ました。そこで講師が跳び箱トランポリンを作り、遊んだ。その後に計測すると上手にバランスを保ち前回の記録を伸ばすことができ嬉しそうな子どもたち。「またやりたい」「今度はケンケンパしてからやってみたい」と意欲的な姿がたくさん見られた。バランスやジャンプにも楽しさを感じ、トランポリンマットでは、より高く飛ぶことやトランポリンから落ちないことなど、目標をもって取り組むことが増えた。自由活動でも、様々な形のブロックに立ち、「誰が一番長くバランスを保って立てるか？」など子どもたち自身でバランス遊びを作り出して立ち方や上半身の使い方などを繰り返し試す姿も見られた。

更に「走る」に着目し、以前の記録を基にどうしたらもっと速く走れるかを考え、実践すると「手をまっすぐにする」「まえをみる」「足をくねくねしないでまっすぐ走る」などたくさんの意見が出た。

さらにどんな遊びをすると記録が伸びるかをみんなで考えると「サッカー」「バスケ」などの遊びが出た。その中のサッカーを実際にやってみると、転ってきたボールをゴールに向かって蹴ることを楽しみ、次々とゴールを決めて盛り上がっていた。その後に走り方などを意識して計測すると、以前の記録よりも記録を伸ばす子どもたちが多く喜んでいた。

また、クラスの運動遊びでマットを介して押す遊びを楽しんだこともあり、押す力をテーマに、「どういう手の形なら力が入れやすいか？」「腕の角度はどうしたらいいか？」について考えた。アザラシのポーズで腕の力だけで進むのは意外と腕の力が必要で、最初はついつい足も使いたくなる様子が見られた。でも、体操講師や保育者の「押すってどういう動作？」などの言葉掛けで、腕を伸ばしたり手の開き方を変えたりしていた。「グーの形の手だと力が入らない」という友だちの言葉から始まり、“なぜだろう？”と考えると「（手の向きが安定せず）ゴロンって廻っちゃうから」と他の子が答えたり、「ボタンを押すときは1本指だね」と講師が伝えると「だって他のボタン押しちゃうから」と、日常生活にも想像を膨らませて次々言葉が出てきた。

ふりかえり（保育士の気づき）：

記録が伸びなかった子も「次は頑張る」と意欲的だったので、自分達で考えて試す事で主体的で積極的に取り組めるのだということを感じた。なるべく沢山の案を実際に試す機会を設けることで、考えることを楽しみながら主体的に取り組めるようにしていきたい。友だちの走る姿などを見て気づきを得てアイディアを出す様子も見られたため、ひとりひとりの発想や試したことを子どもたちの前で認めながら、皆で相談していく活動を増やしていきたい。

また、すくわくでの活動から派生して自由遊びの中でも自分たちでバランス力やジャンプ力を使ったり力を伸ばすような遊びを考え出していたので、子どもたちの興味関心によって、タイミングよく遊びに使える道

具や遊具を用意する大切さを感じた。
また、考えた方法を普段の遊びでも活かせるように、すくわく活動で行った問いかけを日常的に行っていきたい。

【5 歳児実施分】

問いを考える：

基本的な動作である”走る”や、就学に向けて椅子に一定時間座る為に必要な”バランス力”を取り上げ、「バランスを鍛える遊びには何があるか」「どうすれば走力が上がるか？」を問いを持ち、グループごとに話し合うことから始めた。様々な案の中から、竹馬に取り組み、「どうやったら竹馬にバランスよく乗れるか？」と実際に試したり、「どうやったら竹馬で歩けるか？」と具体的な目標を持ちながら考えた。

探究活動の様子：

グループごとにバランスを鍛える遊びについて考えると、トランポリンやケンケンパ、竹馬など”バランス”とイメージしやすい遊びから、腹筋やうさぎ跳び等、体そのものを強くする案もあった。話し合いでは、グループ内で書記や発表者を自分たちで決め、主体的に意見を出し合おうとしていた。

その中で浮かんだ “片足立ちで遊ぶ”という発想から、そこからみんなで手を繋いで片足立ちしようということになった。しばらくこの遊びをした後に、片足立ちの記録を測ることにした。７０秒を目指して片足立ちをして、それぞれの記録に一喜一憂する姿が見られた。

更にバランス力を応用した遊びとして、竹馬に挑戦することにした。竹馬の動きを簡単にイメージしやすくするために、パカパカ（缶ぽっくり）も用意したが、殆どの子ども達が最初から竹馬に挑戦。バーの角度を前後に調節したり体の重心を変えて”落ちないように上手く乗るには？”を考えながら取り組んでいた。竹馬でなかなか一歩が出せない子どもの中には、「練習だ！」とパカパカに切り替えて、足と手をもち上げるタイミングをじっくり試す様子も見られた。「どうやったら足が上がるかな？」の問いかけに、紐を持つ位置を工夫する子ども達。バーの持つ位置を変えたり、足の向きを変えたりと工夫する様子が見られた。

その場でのバランスや歩く動作でのバランス力で体を動かすことをより楽しむようになり、次に“走る”についても考えてみた。“普段やっているフォーム”、“腕を振らないフォーム”、“歩幅を小さくして動かす”の３通りの走り方を試したところ、普段と異なるフォームに面白さを感じながらも、“普段のフォーム”が一番走りやすいことに気づく姿があった。

また、走力を上げるために「ボールを避ける」という案が出てきていたため、そこから「転がしドッジボール」をした。”走る”ことへの意識よりも”ボールを扱ったスポーツ”を楽しむ姿が多く見られたが、繰り返し行う中で、ボールを拾うために機敏に走り出す子や相手にボールを充てるために最短距離で走ろうとする子も見られた

また、押す力をテーマに「どういう手の形なら力が入れやすいか？」「腕の角度はどうしたらいいか？」について考え、アザラシのポーズで腕の力だけで進むことに挑戦した。腕の角度一つで、「それは（床を）押すじゃなくて（自分の体を）引いて（前進している）るね！」と気づく姿も見られた。年長クラスらしく、自分で考えた”力が出しやすい手の形”を皆の前で実践しながら発表する姿も見られた。

ふりかえり（保育士の気づき）：

年長クラスということや字が書ける子どもが多かったこともあり、話し合いから主体的に行えるように問いかけたり環境を整えていった。保育者がファシリテートしながらクラス全体で話し合う以上に、少人数の子どもたちだけで話し合った方が、多様で自由な考えが浮かぶのだということを体感できた。

“走る”“跳ぶ”など、一見、単純に見える動作でも、様々な問いかけや遊び、道具を活用することで、子どもたちが深く考え、試す活動に広げられるということを学べた。

”走る”ことへの問いかけから”ボール遊び”に興味関心が移行する様子がうかがえたが、見守っていくことで、行動から、走ることを試している様子が見られた。保育者がすぐに先回りして言葉をかけるだけでなく、見守ることで子ども自身で試す姿が現れることに気づいた。

友だちのうまくいかなかった動作から発見できることもあったため、肯定的な言葉ばかりではなく、子ども

たちの自己肯定感を傷つけない方法で、“失敗から学ぶ”声掛けもしていくことがよいと感じた。

3歳クラス

4歳クラス

5歳クラス